営農情報

この冬は、厳しい寒さや雪に見舞われましたが、少しずつ寒さもやわらぎ稲作準備を計画的に進める時期となりました。今回は雑草対策を意識したほ場準備と水田除草剤について取り上げます。

ほ場準備のポイント

❶あぜの補修 ―漏水防止で無駄に除草成分を流失させない

田植え後に使用する除草剤（初期剤・初中期一発剤）は、水田の水の中で拡散し徐々に土壌表面に処理層と呼ばれる除草剤の成分が含まれた層を作って、除草効果を発揮することが多く、水持ちの悪いほ場では除草剤の効果が著しく悪くなる場合があります。

そのため、田植えまでにあぜを確認し、漏水しないようあぜ塗機等で補修しましょう。

※あぜ塗りは、土が適度な湿り（土を握って程よく固まる程度）まで乾かし、作業速度は時速0.2～1㎞で行ってください。

あぜ塗作業

❷田面の均平化 ―表土の隅々までしっかり除草成分を行き渡らせる

水田に水を張った状態で土壌表面が露出していたり、水深が浅すぎると十分な処理層ができず、期待した除草効果が発揮されにくくなります。代かき作業時に田面を均平にすることは難しいので、耕起作業時に高低の修正を行うように努めましょう。

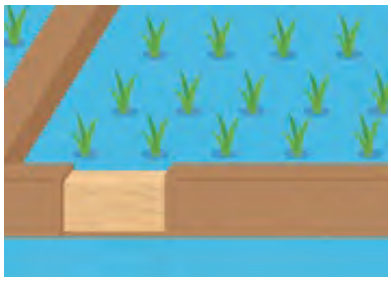
田面露出した部分から生える雑草

除草剤散布のポイント

①散布のタイミング ―散布適期を逃さない

田植え時期の気温が高く推移する年は、雑草の生育が速く、除草剤の使用時期が遅れがちになり雑草を抑えきれないことが多く見受けられます。そこで、除草剤の使用可能な期間を確認し、田植え後できるだけ早く散布することで除草効果を高めましょう。また、ジャンボ剤、フロアブル剤を施用する場合は水を多めに入れましょう。

※雑草は田んぼに水が入ると生長をはじめます。水を入れてから田植えまでの間が空けば空くほど雑草が大きく生長します。



除草剤を使う直前水確認

②除草剤散布時・散布後の注意事項 ―防除効果を高めるために

除草剤の散布後、薬剤が土壌表面に処理層を形成するには3日間が必要です。この時期には水深を5～6㎝に保つようにし、散布後は水口および水尻を再確認して落水やかけ流しをしないよう注意しましょう。また、藻類が発生すると除草剤の拡散が防げられることから、発生する前の薬剤散布が有効的です。

※藻類が発生して除草剤成分の拡散が期待できない時は、藻類が白くなるまで田面を乾かした後に入水し、除草剤を散布しましょう。しかし、散布が遅れるため、除草剤（中後期剤）の散布は各営農経済センターへご相談ください。